

# 文語の苑

メールマガジン第六号（平成二十三年十二月）

平成十七年正月日記

一日

東司より外を窺へば朝焼けの空に紫の雲棚引き、遠く鳥の声して静かなること限りなし。年越しの雪処々に残る。元旦は一幅の絵の如し。散策に長原まで足を伸ばし疲れたるにや、睡意著しく午睡を取る。讃岐宅にて恒例の夕食会、突然泰久現はる。ニュージールランドに約一週間釣を楽しみ、その帰途なる由。

二日

今年酉年にして佐和子、余ともども酉年生れなれば守護尊たる目黒不動尊に初詣に罷り出でぬ。同不動尊、大日如来も併せ祀れば桜子にとりてもその守護尊なれば好都合なり。参道の蕎麦屋にて鍋焼うどんを取り、食後参詣す。護摩法要に加はり、帰宅す。雲一つなき晴天なれども寒気厳しく、のどかなる新年なり。帰宅後午睡三時間、惰眠を貪ること此の如く甚しきを怪しむ。

三日

九時起床。年に似つかはしからぬ深き眠りなりき。瞑想一時間。満足りたる心地す。散歩は長原までと思ひしに、殊の外の寒気に洗足池に留む。林檎とパンの古うなりたるを刻みて持参し、鳥どもに振舞ふ。鷗大いに騒げども好物には非ざるか。鴨も分前に与りたり。法華經久々に八巻を誦了す。

四日

洗足池の鷗至つて敏捷にしてパンを空中に捉ふること当に神業なり。恒例の賀詞交換会に出でし後和田氏と共に三越の吉書展に赴く。岡崎大使出展の書観んが為なり。名士の書あまたあれどあの程度なれば余も亦出展する事を得べし。月例の宗元会佐伯君講師を引受けたり。慶ぶべし。賀状、メールの内に心温まるもの散見。良き慣しなり。熊野君逝ける由。津波被害の続報愈々勢を増す。

愛甲次郎

# 文語の苑

メールマガジン第六号

小倉百人一首 六 山部赤人

田子の浦にうち出てみれば 白妙のふじのたかねに雪はふりつつ

持統天皇のお歌と同じく、百人一首の山部赤人の歌も、万葉集の原歌とは異なった詞句となつて居り、万葉集の原歌は次の通りです。

田子の浦ゆ打ち出て見れば 真白にぞ不盡（ふじ）の高嶺に雪はふりける

この歌の場合も、私には万葉集の原歌の方がずっとよい歌だと感じられます。「田子の浦ゆ」の「ゆ」は万葉集時代の助詞で、現代語の「から」に当たり、私は田子の浦の浜から、小舟で海に漕ぎ出して行った情景を思ひ浮かべます。岸から海に出て見ると、山がぐんと大きくせり出し、山頂には雪が真白に新しく降ったと眼に映じたのでせ（しよ）う。それに比べれば百人一首の歌の、「白妙の」といふ（う）ありきたりの修辭、作者から見えるはずのない「雪はふりつつ」の表現が、腹立たしくさへ（え）思は（わ）れる。

上に挙げた古今集仮名序は、柿本人麻呂と山部赤人を、「山柿」と称し、互ひ（い）に甲乙を付け難い万葉集の代表的歌人とします。それに対して現代の私たちの評価はどうでせ（しよ）うか。柿本人麻呂こそ万葉集を代表する大歌人、山部赤人はよい歌人ではあるけれども、人麻呂には遥かに及ばないと考へ（え）るのではないでせ（しよ）うか。

柿本人麻呂の場合、特に反歌を伴った長歌の圧倒的な迫力は、他の追隨を許しません。山部赤人にも数多くの長歌があります。ただ人麻呂の長歌と反歌が緊密な一体を成すのに対し、赤人の反歌は、短歌として相対的に独立してゐ（い）ます。現代では長歌の方は忘れられ、反歌だけが赤人の歌として記憶されてゐ（い）る例が、多いでせ（しよ）う。

この田子の浦の富士の歌も、富士山頌歌でも言ふ（う）べき長歌の反歌です。長歌は「天地（あめつち）の分れし時ゆ 神さびて高く貴き」と始まり、富士山の大きさ・高さを頌め称へ（え）、「語りつぎ言継ぎ行かむ 不盡（ふじ）の高嶺は」で終ります。形の整つたよい長歌ですが、小ぢんまりとまとまり過ぎた感がある。万葉集には、長歌を得意とする高橋蟲麻呂といふ（う）歌人が居ります。その人の富士を詠じた長歌は、例へ（え）ば当時活火山だった富士山の、「燃ゆる火を雪もて滅（け）ち ふる雪を火もて消ちつつ」といった強い表現の力が、赤人の歌を上廻るのではないでせ（しよ）うか。

山部赤人は長歌より短歌が得意であり、短歌における描写の繊細さから言つても、古今集に近い感性の歌人と言つてよいでせ（しよ）う。その赤人でも、上の詞句の相違から見られるや（よ）うに、平安時代の歌の感性とは、大分違ひ（い）ます。その赤人らしい秀歌を、二首掲げておきませ（しよ）う。最初の歌は吉野を歌った長歌の反歌、第二の歌は、大東亜戦争中に編纂された愛国百人一首に選ばれた歌です。

ぬばたまの夜のふけゆけば 久木生ふる清き河原にちどりしば鳴く

あしひきの山にも野にも御狩人 得物矢（さつや）手挟（たばさ）み乱れたり見ゆ

加藤淳平



# 文語の苑

メールマガジン第六号

## 文語歌曲「故郷の廢家」(明治翻譯唱歌)

この歌は、アメリカでは S. Foster に次ぐ人氣のあつた William S. Hays が作曲した『Dear Old Sunny Home』その歌詞を、犬童球溪(いんどつきうけい)がかなり忠實に翻譯したものです。元の歌は、久しぶりにケンタッキーの故郷へ歸つたら、住む人もをらずに荒れ果ててゐて、私は又さすらひの旅に出なければならぬといふもの。今の日本の過疎村を想ひ起させますが、明治の時代にもイメージとしてこのやうな故郷が懐かしさの原點のやうに考へられてゐたのでせう。

ところがこの歌、ネットで硫黄島との結びつきが語られるやうになつてから、あらためて見直されるやうになりました。米軍の硫黄島攻撃開始、迎へ撃つ栗林軍團との死闘は餘りにも有名でせう。筆者の識つてゐた或るお座敷天婦羅のおやぢは、硫黄島の生き残り、豪放磊落な物腰語り口で客を引きつけてゐましたが、亡くなる直前頃は毎晩硫黄島の砲爆撃の音にうなされたと聞きました。そのやうな激戦の最中、夕暮になつて米軍機が引き揚げると壕から出てきた少年兵の一人が、夕日に向つて故郷を想ひこの歌を歌ひだしたところ、二人三人とそれに合せて、遂には大合唱になつたといふ話が紹介され、人々の心を強く搏ちました。今でも毎年、小笠原村が硫黄島で慰靈祭を行ひ、この「故郷の廢家」を歌ふさうです。遂に故郷に歸ることもなかつた少年兵達への追悼をした上でのことですが、このメロディーがまさか敵國アメリカ人の作曲によるものとは、目前の敵の中に作曲家と同郷のケンタッキー兵があるなどは、つひぞ思ひ及ばなかつたこととせう。それだけに一段と哀れがまさりす。

- 一 幾歳(いくとせ)ふるさと、来てみれば、ノ咲く花鳴く鳥、そよぐ風、  
門邊の小川の、ささやきも、ノなれにし昔に、變らねど、  
あれたる我家に、住む人絶えてなく。

\* 絶えてなく この「なく」は「なし」といふ形容詞の連用形です。連用形といふのは動詞などに連なるからさう呼ばれるのですが、この歌では、ここで文が止つてゐます。名詞で文を止めることの多い歌ですから、それに引かれたのでせうが、このやうな連用中止と言はれる止め方は、その先を讀者や讀み手に想像させるのが狙ひで、俳句や川柳などによく用ゐられます。行き暮れて木の下かげの宿もなく

- 二 昔を語るか、そよぐ風、ノ昔をうつすか、澄める水、  
朝夕かたみに、手をとりて、ノ遊びし友人、いまいでい、  
さびしき故郷や、さびしき我家や

\* かたみに手をとりて 「かたみに」は漢字では「互に」と書くところからも、「たがひに」手を取合つたの意味が納得できます。因みに、唱歌「螢の光」の歌詞二番、「とまるも行くも、限りとて、かたみに思ふ」の「かたみに」も此の意味です。

谷田貝常夫

# 文語の苑

メールマガジン第六号

齋いはふいのち 愛國百人一首を讀む(四)

千早振ちはやぶる神の御坂かみに帛奉みさかり齋ぬさまつふいのちいはは母父おもちちがため

神人部子忍男かみとへのこおしを

「千早振る」は「神」の枕言葉、「神の御坂」は神を祀る場所としての坂を意味しますが、作者の神人部子忍男は信濃國埴科郡出身の防人であり、美濃國に通ずる神坂峠にある神社を指すとも考へられます。「帛奉りて齋ふ」は神社に祈願をする時の作法で、布や紙などで出来た幣帛へいはくを捧げ、「齋」は「いはふ」と訓んで心身を清め、嚴肅な氣持で御奉りおまつをすることを表します。従つて「齋ふいのち」とは自分のいのちを嚴肅に御奉りするといふ意味になります。「母父」は「おもし」とも訓み、兩親のことです。

従つて本歌の趣意は、防人として任地に趨くに途中、峠に鎮ります神の社に幣帛を奉げて我がいのちの全うせんことを御祈りするのにも偏へに父母の爲である、といふことになります。ここで重要なのは神に御奉りしたいのちを全うすることの意味です。大君に召されて防人となることは、場合によつては生命を失ふこともあり得ることを意味します。無事に歸還して父母を安心させるのが第一ですが、假令それが不可能な場合でも、父母を慰め得るやうな働きをし、且つ遠くから永く父母に御仕へしたいといふ願ひが籠められてゐます。

愛國百人一首には掲出歌以外に左に示すやうに五首の「防人の歌」が採録されてゐますが、いづれにも、「神」「大君」「父母」「吾」の何れかが含まれてゐて、同じ願ひを表現してゐることが辨わかります。

大君 <small>みこ</small> の命 <small>いのち</small> かしこみ磯 <small>いそ</small> に觸 <small>ふ</small> り海原渡る父母を置きて	はせつかへのみやつこひとまら
眞木柱 <small>まけはしら</small> 褒めて造れる殿 <small>との</small> の如 <small>ごと</small> いませ母刀 <small>は</small> 自面 <small>じおも</small> 變りせず	文部造人麻呂 さかたへのまろ
霰 <small>あられ</small> 降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍 <small>すめらみ</small> に吾 <small>われ</small> は來にしを	坂田部麻呂 おほとねりへのちぶみ
今日 <small>けふ</small> よりは願 <small>ねが</small> ひなくて大君 <small>みこ</small> の醜 <small>みにく</small> の御楯 <small>みたて</small> と出で立つ吾 <small>われ</small> は	大舍人部千文 いままつりへのよそぶ
天地 <small>あめとち</small> の神を祈りて幸矢貫 <small>さいつ</small> き筑紫 <small>あそ</small> の島を指して行く吾 <small>われ</small> は	今奉部與曾布 いままつりへのあじむみ
	太田部荒耳 おほたへのあじむみ

時は先の大戦の最中、多くの若者が防人として戦地に趨きました。さうした中で萬葉集の、主として卷二十に收められた九十八首の「防人の歌」からこれらの歌を選んだ撰者は、遠く古代の防人の願ひが確かに受継がれてゐることを實感してゐたに違ひありません。さうしてこのことは今日特攻隊員の歌々からも讀み取ることができるのです。

此度の東日本大震災でも現代の防人である自衛隊員を始め、消防やボランティアの勇士達による無私の活躍が被災地の人々の感謝と感動を受けました。昨日には、大君兩陛下が豫後間もない玉體を押して殉職の消防隊員慰靈の祭儀に臨御なさいました。かかる傳統をこそ撰者達は傳へたかつたのだと思ふのです。

市川 浩



# 文語の苑

メールマガジン第六号

## 御子左家の系譜（上）

(1) 俊成・定家の親子が、御堂關白道長の男系の直系子孫であると言つたら、驚く人もあるでせうか。

道長の嫡子は頼通、この系統が後の攝關家の主流になります。

頼通の異母弟に長家といふ人がゐました。特筆すべき事蹟はありません。

長家、忠家、俊忠、俊成、定家とつながつて、歌で名高い御子左家（みこひだりけ）になります。後に冷泉、京極などの家に分かれる一族です。

定家の子供は爲家ですが、忠家から爲家まで、五代續いて、それなりの歌人であるのは注目に値します。

(2) 百人一首に、周防内侍（すはうのないし）の歌があります。

春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむ名こそ惜しけれ

周防内侍は十一世紀後半の人。平棟仲の娘と言はれますが、後冷泉、後三條、白河、堀河と四代の朝廷に仕へた女房です。

この歌は千載集に入集してをり、頃は二月と詞書にあります。舊曆だから、春の最中。場面は皇子内親王（後冷泉院中宮）の御所です。

當時は、廷臣たちが集つて、夜どほし馬鹿話に耽ることがよくありました。簡単に言へば、男女交際の機會を與へるのが目的であつたと言へませう。

(3) この夜、周防内侍も出席して、會話に加はつてゐました。

夜が更けるにつれて、疲れて來た彼女は、そつと横になりました。

男もゐる席で、横になつたりするのか、と驚いてはいけません。

高貴な女たちは、男に顔を見られてはなりませんから、御簾を隔てて會話を楽しむのです。

闇の中のことでもありますし、横たはつても、男の目には觸れません。

横になりついでに、「枕が欲しいわ」と呟いたと思ひなさい。

そこに氣の効いた男がゐました。身分は大納言といふから、半端ではありません。

この男が、御簾の下から腕を差し入れて、「これを枕に」と言つたのです。

それに對して、周防内侍は即興で歌を詠んで答へました。

これが、この歌の由來なのです。

そして、御簾の下から腕を差し入れたのが、定家の曾祖父（俊成の祖父）の忠家でした。

(4)

「女が男の手枕で寝る」と言つたら、ふつつは肉體關係があつたことになります。

ところが、この場面では、本當に手枕をしてやるだけで、それ以上の進展はありません。

「夢ばかりなる」とは、「実質を伴はない」といふほどのこと。愛のない、形だけの手枕です。時間的に短いことをも言つてゐるのでせう。

それでも、二人の間に何かがあつたといふ噂だけは立つてしまひます。何しろ、手枕をしてもらつたのですから。

そんな、形だけの手枕のために、無意味に噂が立つて、名譽が損なはれてしまふのが悔しい、といふ警戒心が先に立ちます。その憂慮を述べて、手枕を謝絶したといふことになるのです。

本當に警戒したわけではありませんよ。戯れに歌の題材にしただけです。

「名が立つ」「名が惜しい」といふのは、和歌には頻繁に出て来る言ひ方。それぞれ、「噂が立つ」「名譽が傷つくのが悲しい」といふ意味であり、特に異性關係で噂が立つて、人から四の五の言はれる場合に使はれます。

(5)

この歌に對して、忠家はその場で返歌をしました。

契りありて春の夜深き手枕をいかで甲斐なき夢となすべき

「契り」とは、「前世からの約束・因縁」のこと。

ゆゑあつて、春の深夜に手枕をお貸しすることになつたのですから、どうしてこれを無意味な夢にしてしまつてよいものでせうか。

反語になつてゐることは言ふまでもありません。「無意味な夢にしてしまふことはありませんよ」といふわけですから、「これを機會におつきあひをしませう」といふ意味を匂はせたのだと言つても差支へないでせう。

本氣だつたかどうかは別にして。

(6)

百人一首の或る注釋書では、周防内侍の歌を絶讚し、忠家の歌を、周防内侍に「及ぶべくもない」と斥けてゐました。

私は、忠家の歌も、捨てたものではないと評價してゐます。

元來、應答の歌は、詠み掛けた方の歌が優れてゐるのが常です。應へる方は、相手の歌の内容に制約されますから、どうしても不利になるのです。

ところが、忠家は、相手の歌の文句を見事に詠み込んで、戀の誘ひを掛けたのです。歌の口調のよさと言ひ、「春の夜の……」に劣らない名歌であると推薦したいものです。



# 文語の苑

メールマガジン第六号

ニューヨークのリムジンカー

拜啓 師走の候、兄上様初め御一統益々御壮健のことと存じ奉賀候。

旅行より無事歸國致し候間、御報告仕り候。今次はまずニューヨーク（NY）に赴き、彼地より出づる船にて南下、カリブ諸島を巡り、またNYに戻りたる後、空路歸國仕り候。例の如く個人旅行なれば、宿、船、交通機關、觀劇切符、その他一切を小生が手配致候。電網の發達にて海外豫約随分簡單に出来る時代に成候へども、道中の都度都度もしや誤豫約かと不安覺ゆる場面あるは、以前と變り無く候。

しかるに同行の妻は一度豫約したる上は間違ひあるべからずと簡單に信込み、心配丸で無く呑氣なるものにて、我は間違ひ許されざる旅行添乗員の心理、妻は氣樂なる客の氣分に候。

旅行手配中の最大難事はNY市内ホテルより波止場に至る足の確保にこそあれ。波止場は邊鄙の地にあり、さなきだに不勉強なるNYタクシー運轉手しばしば乗船場に辿り着けず、出航時間迫りて肝冷せる段、見當違ひの場に無理矢理降され大なる荷物を抱へて途方にくるる段、電網上、枚擧に違無し。

公共交通機關無く、タクシー頼るに甲斐無ければ、残れる手段はリムジン車のチャーターのみにて候。然乍らこれにも別なる困難あり候。

豫約の場所時間にリムジン來らざるのとき如何にすべきか、是なり。彼等は客が携帯電話有するを前提とし、客と會せざる時は電話連絡にて對處する所存に候。つまり米國用携帯電話持たざる我には事故時の辨じ方無き次第。ホテルの電話は室の勘定濟せば使用出來申さず。本件解決の方途無かりて困り果て候。

腦漿を搾りたる末、これまでNYにては大規模ホテルに泊るが通例なれどもこれを變更し、受付が會計係を兼ねる如きプチホテルの利用に思ひ至りたり。さすれば勘定後帳場脇にて車を待ち、必要生ずるの時は受付係を介しての交信可能ならむ。定めて名案なるべし。電網上に豫算内なる格好のホテルを探し當て、更にそがロビー、車到着を認め得る位置に在るをグーグルビューにて見届け得心の上、豫約致候。

同所に二夜を過し、乗船の朝、くだんの帳場にて待つうち、リムジン幸ひにも約束通りホテル前に出現せり。備へはあれども不測事態生ぜざるに如くは無し。波止場には定刻に着きたり。

旅行中の最たる難所と身構へ居りし懸案、無事に通過。かてて加へてリムジン價格、タクシーより安價にて候。萬事申分なき次第にて我が安堵快哉御想像被下度候。なほ、この痛快事、妻に説明致せども然程の反應はあり申さず。

右は御機嫌伺ひかたがた御報告迄。良き正月をお迎へなさるべくお祈り申上候。 敬具

兄上様

稔

兒玉 稔